



あるじでえ

No. 30

世田谷区教育委員会 民家園係
〒157 世田谷区喜多見5-27-14◎次大夫堀公園民家園
☎03(3417)8492◎岡本公園民家園
☎03(3709)6959

平成8年7月1日 発行

建物の普請と建築儀礼

建築儀礼とは

○ 一つの建物（民家）が普請ふしんされるには、多くの職人の手が加えられます。大木や大石を挽き立てるたてかた鳶職人、木材の加工や建方などを行う大工職人、茅屋根を葺く茅葺き職人、木舞下地を造る木舞職人、土壁を塗る左官職人など、こうした昔ながらの伝統技法を受け継いで来た職人たちの技によって築かれて行くのです。

そして、その過程にはこれに携わる人々の間で、古来からさまざまな儀式が執り行われて来しました。その主なものには、地鎮祭じちんさい、ちようなはじ鉾始め、りっちゆうさい立柱祭、じようとうしき上棟式、ふきごも葺籠り、家移りやうつなどがあります。これらは天神地祇てんしんちぎを祀まつって、工事の無事や建物の末永い安全を祈願して行われたものです。また、工事

の成就していく過程を祝い、工事関係者の労をねぎらうための意味もあったようです。

こうした儀式は、古代中国より伝わったおんようどう陰陽道の影響を受けたもので、特に平安時代以降盛んになりますが、農村などにおける民家の普請では、近世以降になって行われるようになったようです。

現在、区立次大夫堀公園民家園内で行われている旧安藤家住宅主屋及び土蔵の移築復元工事も、でき得る限り近代工法を取り入れず、復元可能な限り旧来の技法や手順を再現しながら進められています。この移築復元工事にあわせ、今回から数回に分けて、こうした近年失われつつある昔ながらの“職人の技”や“建築儀礼”について紹介して行くことにしましょう。

建築儀礼 ① 地鎮祭

地鎮祭は、土木や建築の起工にあたり、大地（敷地）の地主神を鎮め、工事の無事を祈願するために行われる神道的な儀式です。

○ その始まりについてははっきりしませんが、『日本書紀』の持統天皇5年(691)10月に、「使者を遣わして新益しんやくの京を鎮め祭らしむ。」とあり、その翌年の5月の条には、「浄広肆難波の王等を遣わして、藤原の宮

どころ地を鎮め祭らしむ。」とあるのが最も早い例として挙げられます。また、『統日本紀』の和銅元年(708)12月の条にも「平城の宮の地を鎮め祭らす。」とあることから、白鳳時代にはすでに行われていた儀式のようです。

この儀式は古来、しげまつり鎮祭・みやじかまむるまつり宮地鎮謝・しまつり地祭・じひきさい地曳祭などとも呼ばれ、今日いう地鎮祭は平安時代後期ごろからの呼称のよう

で、かつては“トコシヅメノマツリ”と訓み
ました。現在でも地域によっては、地祝い
とか土祭りと呼ぶところもあるようです。

その祭神については、古事に記載がない
ために後世種々の説に分かれましたが、現
在はその土地の守り神である産土神と、土
地統率の神で天下の大地盤を司る大地主神
の二神を主神として祭ります。また、祭式
については、『延暦儀式帳』の伊勢神宮の
式、『貞観儀式』の大嘗祭地鎮の式などの
比較的古いものから、仏教や陰陽道と習合
した両部神道・吉田神道・橘家神道の式ま
で、それぞれが各々の祭式で行ってしまし
ましたが、明治時代以降国学の興隆に伴って、
古態に復する努力がなされました。

『諸祭式要綱』によれば、現在の地鎮祭
は、用地の中央に南面して神籬を据え、そ
の四方に斎竹を立てて注連縄を回らし祭場
としています。清祓ののち、一連の行事
の中で神々を迎え祝詞を奏し、土地の中央
と四方を祓い、斎鎌・斎鋤・斎鍬で草刈り
・地均しの式を行って、鎮め物を埋納して
います。この時の鎮め物は、鉄の人像・鏡

・ 剣・銚・刀子などを、折櫃または石櫃
に入れて埋めるのが正式のようです。

但し、こうした祭式は、ある限られた建
物（神社仏閣や権力者の邸宅など）の造営
に際して行われた来たものの踏襲で、当民
家園に建てられているようなかつての村落
における農家などの普請の際には、少なく
とも江戸時代までは工匠（大工）の棟梁
が祭主となって執り行い、非常に簡略化さ
れた式であったようです。そして、鎮め物
をする場合でも、その村の鎮守（神社）よ
り頂いて来たお札【写真1】を埋納する程
度でした。

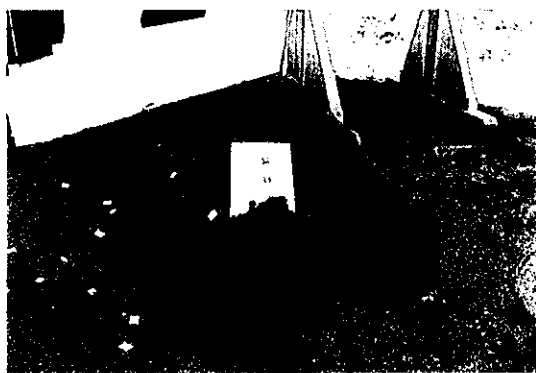


写真1 鎮め物のお札

職人の技 ① 鳶職人

鳶職がいつの時代から1つの職種として
固定化されたのか定かではありませんが、
近世の初頭にはすでに“鳶の者”と呼ばれ
て江戸の町中に見られました。普通一般に
“鳶”あるいは“鳶職”などと呼ばれてい
ますが、この名称は彼らが鳶口または鳶と
呼ばれる檜棒の先に鋼鉄製の鉤をつけた道
具【図1】を携行したことによるといわれ
ています。

その仕事内容は、その鳶口を使って大木
や大石を挽き立てたり、地業（基礎工事）
や建方（上屋の組立て）、足場の組立て、曳家
（建物の移動）、矢板打ち等、建築土木の普

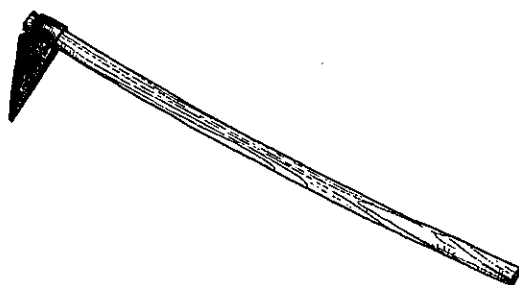


図1 鳶口

請に携わっていました。なかでも、重い大
木や大石を挽き立てる際には、多くの人の
力を必要としたので、全員の呼吸を合わせ
るために、音頭を取って声を掛け合う鳶職
独特の木遣唄が歌われました。

そして、この外にも、大工・左官・石工等の手伝い、井戸掘り、町内各家の松飾りや祭礼の用意等を行ったりと、様々な仕事を一通りこなせるといふことから、俗に江戸では“仕事師”、上方（京・大坂）では“手伝い”とも呼ばれていました。

また、享保3年（1718）12月に江戸で町火消しの組織ができると、鳶職はそれに編入されて町抱えとなり、町火消し人足も兼ねるようになりました。火消し人足を鳶と称するのはこれに由来します。しかし、この時の地域割が適切でなかったため、享保5年（1720）8月に改めて組織の再編成が行われました。この時にできたのが、江戸の町火消しで有名な“いろは四十八組”と“本所深川十六組”というわけです。

ところで、鳶職は元来、江戸の町人文化とともに発達して来たもので、農村であった世田谷辺りには、明治以降になってから入って来たものようです。江戸時代後期に書かれた世田谷の古い記録（『商売家数等

かきあげ書上』など）を見ても、大工や杣、木挽き、屋根や等の職人（農閑業として）は、どの村にもほとんど見られますが、鳶職の記載は全く見当たりません。おそらくは大工、あるいはその手伝いできた村人が、鳶職の代わりを勤めていたのでしょう。

そして、明治以降には世田谷辺りでも、櫓を組んだ地業（よいとまけ）や、大工付で建方を行う、鳶職としての職人が現れ始めました。また、岡本公園民家園の旧長崎家住宅主屋復元工事で地業・建方を行った宗田組（屋号を“曳政”と称す）のように、曳家を専門とする鳶職も現れましたが、やはり鳶などとは呼ばれずに、“仕事師”と呼ばれていました。

櫓地業（よいとまけ）

櫓地業とは、地固めのために櫓を組み立て、人力によって行う大掛かりな基礎工事のことです。

押角と呼ばれる4本の柱を四方運びに立

木遣唄 一第八区五番組木遣会より

一、舞鶴

オーオーイヤルヨー
エーヨーオー

二、手古

オーイヤーレーテ
テーコーセーエーエイエーエー
ホーイヤーアーネー
メワーヨーイーズ
コーレワセーエーエイエーエー
ホーイヤーアーネー

三、棒車・掛塚

サラバーアヤアル
ルーウワアエエニャアラヨーオー
ヨーオーサーアセーエーエーエー
エエアーヤアーネー
エーエーエー
ヤレーコリャーネー
ナツーカーノオーツ

ナーカーアラエエニャアラヨー
オーオーヨーオーサーアセー
エーエーエーエエーイーヤアーネー

ヨーニャーレーセー

アソーリャアー
ヤレーコリャアーネー

サーアアラーアバー

エーエーエーメローヤーアレー

エーエーニャーアラヨーオイヨー

オーイーセーソーリャーヨーイーサー

ヤレコレワーヤレコレワー

ソーンレワー

エーエーエーヤーエーエーメローカー

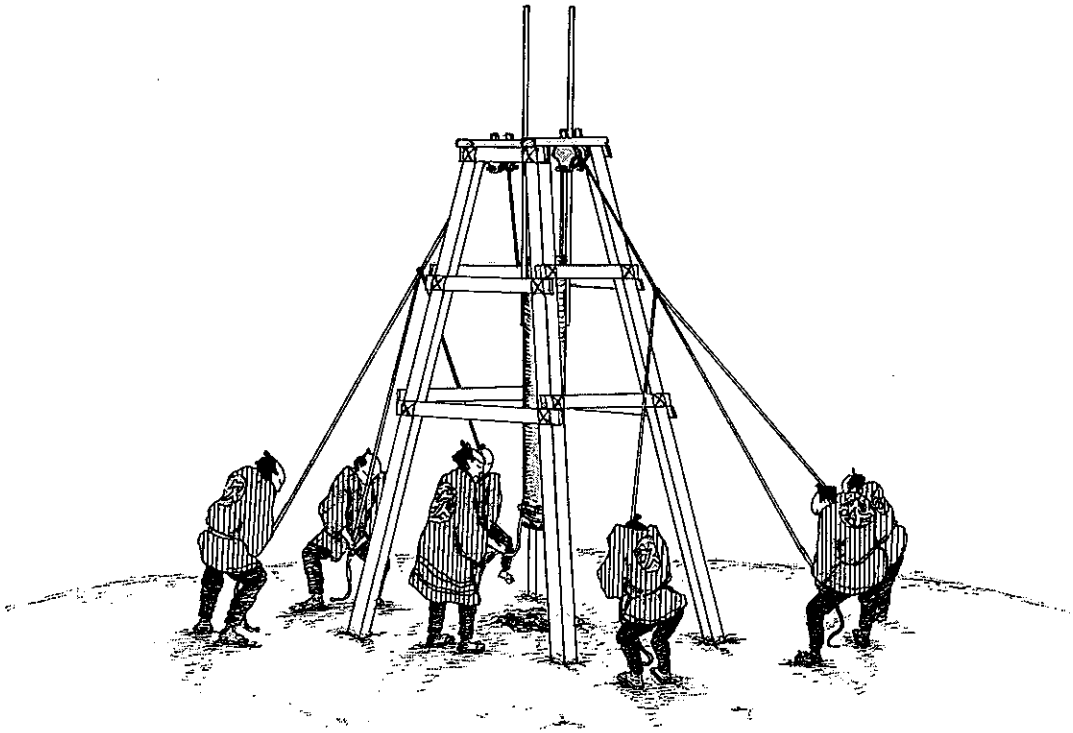
ケエエローエーエーヤアーレー

ヨーオーオイセーイイヤーレー

ヨーイーサーヤレコレワー

ヤレコレワーソーンレワーエー

エーエーヤアーラーアイネー



て、これに水平材（貫）を渡して構造的に固めた檣を組み、その中央にタコと呼ばれる洞突棒を引き綱で結わえ付け、これを滑車によって多人数で上下させて打ち落とし、柱や床束を受ける玉石を載せるための割栗石を突き固めるわけです。

その規模(洞突棒の重量)によって、6人突き・8人突き・10人突きなどがありますが、この時の人数は“綱子”と呼ばれる洞突棒を引き上げる引き手の数になります。

かつてこの綱子には女性の足が当てられていました。というのも、腕の力だけで綱を引く男性に比べ、身体全体を使って引く女性の方が、洞突棒を引き上げる力が一定するために重宝がられたわけです。この辺りでは、上馬に綱子の元締め(女性)がいて、各仕事場へ手配をしていたそうです。

また、檣の中央には“根取り”と呼ばれる音頭取りが付き、洞付棒が一定の箇所に着るように、その下端に繋いだ綱を持って振れを調整するとともに、音頭を取って綱子の呼吸を合わせました。

この時の音頭は、先に挙げた木遣唄とは違って、その内容はその時々により異なるもので、その日の天候を歌ったものから、その家の事を歌ったもの、時には器量の良い村娘の事を歌ったものなど、その場の情景に応じて即興で作られたものでした。地方によっては、この唄も含めて“木遣唄”といったり、先の木遣唄とは区別するために“地突き唄”あるいは“洞突き唄”とするところもあったようです。

また、檣地業そのものも“石場搗ち”といったり、“真棒洞突き”あるいは“千本洞突き”と呼ばれるなど、各地で様々な名称が付けられていましたが、世田谷辺りではこの時に歌われた唄の掛け声から、俗に“よいとまけ”とも呼ばれ、昭和30年代中頃まで行われていました。

尚、今回世田谷における鳶職の話は、江戸消防記念会第八区五番組の副組頭を務める、清水組の頭・清水光蔵氏に主に伺ったものです。

区文化財資料調査員 高橋 誠